

文化高知

2003年5月 NO.113



「蛙と老婆」
ツシマユキコ

〈もくじ〉

大人とこどものアンパンマンミュージアム	田所菜穂子	2
「自然の豊かな高知県」?	和田剛一	3
第13回高知出版学術賞を審査して	中内光昭	4~5
原作と映画作品の背離	山川禎彦	6~7
ドイツの楽しみ―「結婚」編	塩見由利	8~9
挑戦 運転奮闘記	田代夕子	10~11
舞台のお仕事	青木達之	12
高知市文化プラザかるぽーと春の自主事業のご報告		13
風俗歳時記・風伯		14~15

大人と子どももの アンパンマンミュージアム

田所菜穂子

テレビで幼児に圧倒的人気を誇る「アンパンマン」。最近の日本の子どもはほとんどが、一度はこのキャラクターのファンになるのではないかと。一、二歳でファンになり、五歳にもなると「アンパンマン、ださい。もう卒業」と言って冷淡に突き放す（商品開発路線の影響が多分にありそう）。これも、あつという間に大人になる。

今年、アンパンマン最初の絵本出版から三十年、テレビアニメになって十五年。息の長い作品だが、知らない方のために簡単に説明すると、原作・やなせたかしで、アンパンの頭をしたアンパンマンが「おなかをすかせて困っている人に、自分の頭を食べさせて救う」というモチーフをベースにしている。「社会正義は立場によって約変するが、人が生き残るための、食べ物に困っているとき、

それを助けるのは正しい。そして、正義を行なうには自己犠牲の覚悟が必要」と、作者は言う。「あんばんまん」は最初大人のためのメルヘンとして生まれ、絵本はともかく、やなせ氏は、作品全体を低年齢の赤ちゃんと向けに描いてはいない。「幼児の周囲にいるのは大人なのだから、大人の鑑賞に耐えるもの」、自分が描きたいものを描くということだ。



そして、アンパンマンミュージアムは、その来館者の設定を「大人から子どもまで」として建てられた（本来「やなせたかし記念館」としてやなせ作品の展示・保管が建設目的なのだ）。やなせ氏の意向を踏ま

え、多少遊び心を取り入れた、誰もが気軽に入れる美術館を目指している。ただ、「誰も」という言葉の中に、赤ちゃんは想定されていなかった。ところが、テレビのアンパンマンを熱烈に支持しているのは、一歳（三歳の、言葉が話すか、話さないかの幼児で、そんな子や孫が、回らぬ舌で「アンパンマン、アンパンマン」と言うので、どうしてもアンパンマンのお家へ連れて行ってあげなくてはならぬと、日本の隅っこにあるミュージアムを目指して全国からお客様が来てくださる。

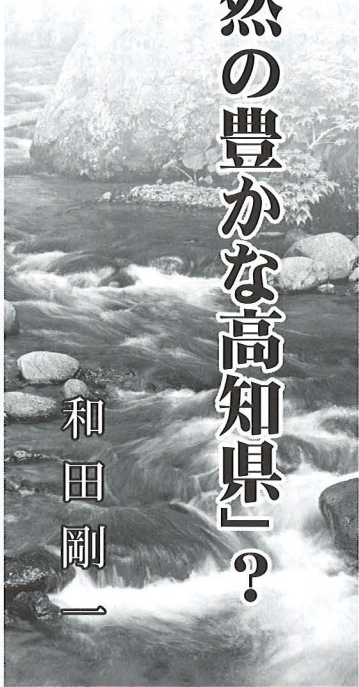
雑誌やテレビ等で見た電話番号を頼りに、問い合わせのお電話をいただくのだが、そのやりとりの中で、多くの方が、遊園地・テーマパークを期待しているのがわかる。そして、こちらが、「アンパンマンの原画展示や、ビデオ上映などを見ていただいたり、ジオラマ等の立体展示を見てもらう美術館施設です」と説明すると、99・9%「二歳の子が行っても楽しいね」と反応する。乗り物や、ぬいぐるみショーがない所へ、幼児を連れて行ってしまうのがないという発想だ。けれど実際に館に来ている子どもたちを見ていると、ジオラマのコーナーはむしろ、絵の展示も、十分



に楽しんでいるようだ。子どもたちは絵本を楽しむように、作品や展示物を眺めたり体感しているようで、連れの大人に、キャラクターの名前を教えたり、あるいは逆に、絵の解説を読んでもらったりして喜んでい

る。「絵本が楽しめるなら、美術館も楽しみようがある」ということだ。大人が自分の尺度で、子どもを見くびってはいけないし、子どもの感覚を大人は本当はあんまり分かってないこと、自戒しなくてはならないと思う。初めての体験を沢山して、子どもは育つのだから……。

「自然の豊かな高知県」？



和田剛一

日本のホエールウォッチングの仕事

掛け人ともいえるべき漫画家の岩本久則さんと話してみると、彼の遊びのエリアは鏡川の下流域であった。わたしは鏡川の源流部、土佐山村で生まれ育った。少し時間差はあるけれど、鏡川流域の豊かな自然を満喫して育つことは同じである。

四十数年前、わたしは鳥たちと毎日遊んでいた。もともとおもしろかったのはメジロ。活発でかわいく、丈夫で人に馴れやすいこの鳥は、子供が飼育するには最適だった。あとは、ヤマガラ、オオルリ、ホオジロなどの小鳥から、アオバズク、サシバ、ミゾゴイなど、土佐山村にいる鳥はかたっぱしから捕まえ、飼っていた。ひとりっこだったわたしは、鳥たちが人に馴れたところで野に放し、いっしょに遊びたかったのだ。いま思えば、なんてひどいことをしていた

のだろう。

三つ子の魂なんとやらで、気がつけば野鳥カメラマンと呼ばれるようになっていた。北に行けば、オオワシやオジロワシといった高知では見られない鳥たちがいっぱいいる。南国高知とはいっても、沖繩の鳥は沖繩に行かなくては見られない。あの鳥に会いたい、この鳥を見たいと北に南に飛び歩いているうちに、いつしか三十年以上遊んでいたのだった。その間、高知に一度も帰らなかったわけではなく、毎年八月いっぱい土佐山村に帰っていた。しかし、暑い盛りのことであり、山に入ること一度としてなかった。

五年ほど前、家庭の事情で軸足を高知に移すことになって、はじめて高知の山に入ってみた。子供のころは土佐山村から出たことはないのに、高知の山々を見るのははじめてであ

る。わくわくと期待に胸をときめかせていたのだが、そこで見た光景は……。くらぐらと目まいを覚えるほどのショックだった。

たとえば、四万十川流域の一の叉国有林、三百六十度見渡すかぎりスギやヒノキの人工林がひろがっている。久保谷国有林、春分峠から見渡せば、折り重なる山々すべてスギやヒノキの人工林である。このような状況は、中部の嶺北地方でも東部の山々でも同じであった。ようするに、高知の山々は、スギとヒノキ一色とあっていいだろう。これでは、鳥たちのすみ場所はないのではないだろうか。

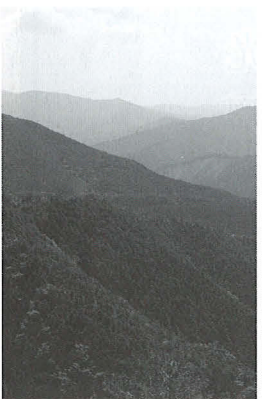
四万十川のダムの撤去が問題になった時、本州の友人三人と見に行つたことがある。ダムサイトに立つた時、三人とも思わず顔を見合わせてしまった。これは、ダムではなく取水堰ではないか、このていどの水を取水しただけで、下流に一滴も水が流れないなんて、川やダムが問題なのではなく、保水力の落ちた山を問題にすべきだろう、と意見は一致したのだ。

高知のマスコミやお役所は、まるで枕詞のように「自然の豊かな高知県」という。県民や県外の大部分の人々も、高知は自然の豊かなところ

だと思っている。しかし、友人にいわれてしまった、土佐には山も木も川もいっぱいあるけれど、自然はないね、と。

わが家がある集落では、昔いっしょに遊んだ連中がリーダー格になって、シレエ（彼岸花）祭りをやって昔の遊びをなつかしがったり、ホタルを増やしてまた遊ぼうと除草剤を使わない申し合わせをしたりしている。かろうじて、自然が豊かだったころを覚えていてる世代だ。そこで、わが家のスギ山を伐採し、ヤマザクラやモミジを植えて、人も楽しみ、鳥や生きものにも喜んでもらえる森をつくることにした。ほんの二十軒弱の集落だからできることはわずかなことだが、やり過ぎたと思つた時に復元力を持っているのが人間である。小さな一歩ではあっても、いつの日か、これが自然の豊かなわが故郷、と胸を張れる日がくることを信じて。

（わだごういち／カメラマン）



第十二回高知出版学術賞を審査して

申内光昭

「夏目先生が亡くなられてから、もうどこへも遊びに行くところがなくなつた。小弟の二十才頃から今日までの廿年間の生活から夏目先生を引き去つたと考えると、残つたものは、木か石のようなものになると思ひます。不思議なことには、私にとつては、先生の文学はそれほど重要なものでなくて、唯の先生そのものが重要なものであります」

漱石の死後、寅彦の述懐である。二人が、旧制五高以来の師弟関係であつたことはよく知られている。でも、寅彦にとつて、漱石が、ただ一人の「人生の師」であるだけでなく、漱石にとつても、寅彦が最も身近な弟子であつたこと、さらに、二人が作品の上で「共鳴現象」を呈していたことなど、を緻密な考証によつて明らかにしたのは、今回、惜しくも選に漏れた、沢英彦さんの「漱石と

寅彦」である。

本年は応募作品十五点で、昨年、一昨年の二十点と比べると、やや寂しい感じがするが、分野のバランスも取れ、着実な業績が多かつた。第一次の審査を通つた七点について、精読し、意見を交換した後、投票を行つて受賞作を選び出そうとした。ここで、困つたことが起こつた。三位に二点が並び、改めて、両者について検討を加えたものの、どちらも捨て難く、本賞の視点からは、両者に差はつけ難いという結論になつた。選挙であればここで「くじ引き」ということになるが、どうも、賞にくじは馴染まない。そこで、全く別の視点で結着をつけることにした。「分野のバランス」、「過去の受賞経歴」、さらに、今後の研究を激励する意味を込めて「著者の△若さ▽」などである。その結果、全員一致で、

次の三点が受賞の栄を受けることになった。

住友雄資 責任編著

「精神保健福祉実践ハンドブック」
(日経出版発行)

本書は、「精神保健福祉士法」(一九九七年施行)に基づいて、新しく、専門職として誕生した、精神保健福祉士のために、その活動の理論と実践を解説した、パイオニア的著作である。目的も実体もハンドブックではあるが、内容の、質や体系が、「学術」としての評価に十分耐えるものと認められた。

本書は、代表編者が、全国の関係者にインターネットで執筆を呼びかけて構成した、編者三名、著者八名よりなる執筆者集団の合作である。内容は、理論の枠組みの中に実践

の位置付けが明示され、いろいろのケースに当面した現場の「福祉士」が、具体的な対応を考えられる構成になっている、実用的かつ便利で、専門外の人にも理解できる。法律・法規一覧、索引も便利である。

高橋正著

「西園寺公望と明治の文人たち」
(不二出版発行)

西園寺公望は、フランス留学から帰国後、中江兆民と、自由民権運動の機関紙とでもいふべき「東洋自由新聞」を創刊、やがて、伊藤博文のあとを継いで「政友会」総裁になり、再度総理を務め、引退後も「キング

メーカー」の力を持つ元老であり続けた。

本書は、公望と明治の文人や思想家との交流に焦点をあて、その交流や、各人の「時代」への対応などを、ありありと描きだして、読んでゆくうちに、明治中期から末期の我が国の社会のうねりが実感できる小説的要素を持っている。

西園寺が「リベラル」であつたればこそ、総理として「日本平民党」

や「日本社会党」の結党を認め、それゆえに、右翼の攻撃を受け、やがて、内閣は崩壊する。その結果、桂太郎帯剣内閣の誕生、幸徳秋水の刑死へと雪崩れてゆく、明治の政治風土を、政治家と文士との交流から眺める視点はユニークである。

多くの資料を採り出し、当時の時代背景や、文士との交流の細部を緻密に追求する実証的態度が評価された。

佐藤恵里著

「歌舞伎・俄研究」
(新典社発行)

著者によると、本研究の目的は、元禄期の江戸歌舞伎と俄の考究を通じて、両者が民間の芸能としての本質を共有していること、また、俄は、歌舞伎や狂言というこの国の演劇の原質を形成するものではないか、と

いうことを、提示することにある、とされている。

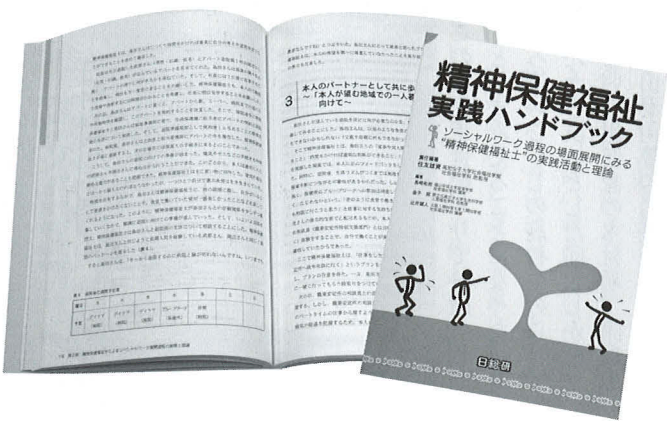
二十年の歳月をかけ、今や貴重な俄の残る室戸市佐喜浜に、たびたび足を運んでの、たいへんな労作(本文七百六十ページ)で、三編から構成されているが、第二部がとりわけユニークである。

全国的にも貴重な文化遺産である佐喜浜俄を、学術的、精力的に研究したもので、俄を支える「若者宿」などの民俗調査は緻密、貴重な談話等を収録するとともに、行事の伝承のしくみ、台本の作製、所作、などを、ありありと描きだしている。全編を通じ、歌舞伎の底に流れる俄の姿を具体的に浮かび上がらせた功績は大きい、と評価された。

資料編として、佐喜浜関係の俄の台本四百三編を翻刻、収録し、その年の主要な出来事と対比させているのも貴重な仕事である。

この研究を機会に、著者が会長を務める全国的な俄学会が設立されたとのことで、高知が俄研究の情報発信の中心地になったのは、高知の学問風土のためにも喜ばしいことである。

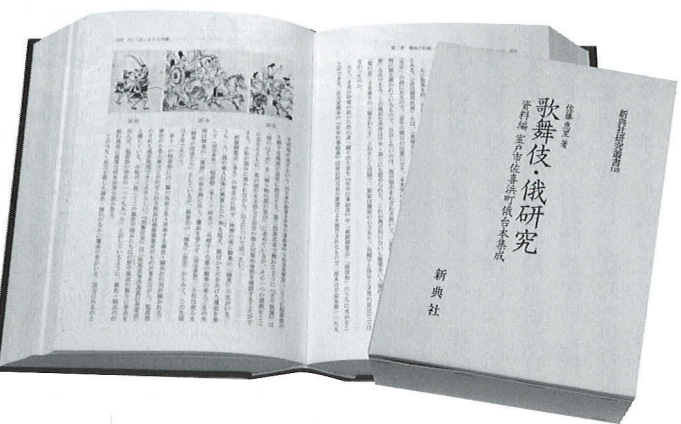
なかうちみつあき／高知大学元学長



「精神保健福祉実践ハンドブック」



「西園寺公望と明治の文人たち」



「歌舞伎・俄研究」

原作と映画作品の背離

— 映画「足摺岬」を観て —

山川 禎彦

このたび半世紀ぶりで映画「足摺岬」と相まみえることになった。なにしろ遠いむかしの高校生のころであつたから漠然とした印象しか残っていない。出演者の木村功、津島恵子、殿山泰司等の名優たちの面影がおぼろに記憶の襞にのこっているが、全般的な印象としては戦中の暗い世相のもとで仄かに咲きかけた男女の淡い愛を綴った青春ものといった感じであつた。

今回県文学館で八小夏の映画会／主催で「足摺岬」が上映されるについて、たまたま私は上映後に短いレクチャーを依頼されていた。「田宮虎彦と映画八足摺岬Vについて」の演題であつた。

観ているうちに私の胸の中に、オ

ヤツ、の疑問符が並びはじめ予め考えていたレクチャーの内容を大幅に軌道修正しなければという焦りが募つた。半世紀前には、田宮虎彦の小説に疎く、それだからこそ意外にすつきりと映画の内容が当時の私の頭の中に入つてこれていたのかもしれない。

私が田宮虎彦の作品を系統だつて読み始めたのは二十年ぐらいあとのことであつた。彼の作品の根底には一種の無常感が漂つており、「落城」に見られるように勝者と敗者のむなしい角逐、生活苦と厭世感、家族間の確執等から派生する愛と絶望と希望との相克を好んで描いた。

今回映画「足摺岬」を観て驚いたことは、足摺岬の題名のもとに「絵

本」「菊坂」「足摺岬」の三編から取捨選択して、更に原作にない挿話を注入し再構成して一編の新たな作品としている。おかげささいえば、三軒の家屋を解体し、新たな建材を補つてリサイクル的な家屋を建てたようなものである。もつとも、活字の世界を映像の世界に移す折には、主題に沿って改変や補足の操作がおこなわれることはさして珍しいことではない。が、歪曲、変更となると問題は別である。

原作「絵本」は、カリエスを患つた寝たきりの少年と生活苦に喘ぐ大學生、その隣室のこれまた新聞配達などして生活を凌いでいる中学生の三人に焦点をしばつている。特高の眼が光る戦中の暗い世相のもとで、

三人は生活苦、孤独感、寂寥感にさいなまれていた日常であつた。少年はやさしくて心暖かい浅井（原作では「私」）に接するたびに寂寥感が解かされるおもいであつた。毎夜おそくまでアルバイトの謄写版の原紙に鉄筆で文字を削る音が途絶えると、少年は、ああ、浅井さんの仕事がおわつたと安堵してはじめて眠りにつくのだつた。

生活に行きづまった浅井は身辺のものを悉く売り払い他所に引越していく。そのお別れに僅かな金をはたいてアンデルセンの絵本を少年に贈るのだつた。絵本は、夢と希望をあらわしている。人間のあたたかい心のまじわりを絵本で象徴しているのだ。

原作「足摺岬」は、生活苦と病苦におかされた大學生が厭世感にとりつかれ自死を求めて足摺岬にやってくるはなしである。遍路宿の清水屋で高熱のため病床についた青年を、同宿の薬売りと遍路、宿のかみさんと娘の手厚い看護で彼ほしだいに回復していく。金がないといって売薬を断る青年を、「おぬし、金などどうにでもなることじゃ……生きることは辛いものじゃが、生きている方がなんぼよいことか」と叱咤激励され、一方では元黒管藩の生き残りの遍路の凄絶な生きざまを聴かされることによつて、命の尊さに目覚めてくる。病癒えた青年は自分に恋心をいだく宿の娘八重を連れて東京に戻つていく、までがこの作品の荒筋である。

映画化された「足摺岬」にはさまざまな変更歪曲があるのだが、ここでは煩わしいので八重一人にしぼつてみよう。原作「絵本」や「菊坂」

には八重なる女性は全く存在しない。この女性も原作「足摺岬」の最終部にわずか顔を見せるだけである。が、映画では最初から八重は大きな比重をもつて登場している。浅井の隣室の新聞配達の苦學生の姉となつており、近くの食堂で働いている美しくて明朗な娘という設定である。苦學生の弟がふとしたことで窃盗犯にまぢがわれ警察で拷問にかけられる。容疑ははれたが心のショックで彼は自殺した。傷心の姉は仄かな浅井への恋慕を残したままふる里の清水に帰郷する。作品の前半に登場する八重は全くの架空の存在である。

さらに驚くのは、原作と映画との結末の相違である。原作では、宿のおかみの手厚い看病、薬売りや遍路の温情によつて蘇生した青年が新たな希望をいだいて宿の娘八重をもらいうけて東京に帰還する。ところが、映画では、八重はふる里の他の男と結婚することになり、傷心の浅井は

一人東京に帰ることになつている。これでは内容の変更というより主題の歪曲につながっている。

原作者田宮虎彦はどういつているのか。

「新藤氏（脚本家）の意見は、勿論、吉村氏（監督）も加わつていただろうが、八重が浅井と結婚しないことによつて、浅井の生きようとすゝる意志をいっそう強く表現出来るということであり、私が脚本に不安を感じた空白は、吉村氏の演出が十分おぎなえるということであつた」（一九五四年八月「映画芸術」—原作者として—。傍点は筆者）他の場所でも、原作の変更、歪曲をいとも容易に田宮虎彦は認めている。このことについて私は批評する言葉を知らない。新藤氏の大胆な意図もさることながら、容認する田宮氏の寛容さにただ脱帽するばかりである。

田宮虎彦は繊細でやさしい心情を

もつて優れた作品を書いた。私は映画を観ているうちに、心の片隅で、彼の愛妻千代夫人の死後に出版された「愛のかたみ」（妻を慕う）の最終三行の文章が去来して仕方がなかつた。

—千代、千代、何故死んだのか。お礼もろくすつほいえない前に。あとに残されて私は今生きる喜びなど一つもない。もしいささかでも喜びがあるとするなら、それは、一分一秒、私がお前のいつてしまった死に近づいているということだけだ—

事実、田宮虎彦は昭和六十三年七十六歳で死を待ちきれずに青山の十一階の自宅マンションから飛び降り自殺をした。終生、嘘のつけなかつた清純な人であつた。

（やまかわさだひこ／高知文学学校運営委員）



ドイツの楽しみ —「結婚」編

塩見由利



ドイツでドイツ式の「結婚」など経験するのはごく限られた状況だろうし、「ドイツの楽しみ」のタイトルにふさわしくないかもしれない。また、「ヨーロッパの結婚はウエディングドレス着て教会で式挙げて大差ないんでしょ」と思う人もいるかもしれない。しかし実は、結婚式や結婚前後の祝い方は、各民族の伝統の名残をとどめ、それぞれの地方色豊かな、ものすごくおもしろいものなのだ。ウエディングドレスは確かにフランスでもポーランドでもたいそうな違いはないのだが、ドイツでのその祝い方はあっと驚くものである。

ドイツ語圏では結婚式の前夜、「ポルターアーベント」というパーティーをするのがふつうである。ポルターアーベント。『図説ドイツ民俗学小辞典』をみると「結婚式前夜の無礼講」とある。ポルターとは、あの「ポルターガイスト」(がたがたと動くはずのないものが揺れたり音が出たりする心霊現象)の、ポルターである。ただし、ここで騒々しいのは幽霊(ガイスト)ではなくて、招かれた客たち。ポルターアーベント(騒々しい夜)は、それはそれは大変な夜である。ドイツから北欧では、たとえば誕



生日であつても、その当人がごちそうされるのでなく自分から皆にごちそうするのがふつうである。

日本でも、結婚式の披露宴なら同様ではあるが、ポルターアーベントはお招きしたい人には招待状がきちんとして行っているはずではあつても、その招待客が何人ひとを連れてくるかはつきりわからない。まあ、日本の披露宴のように席や時間がきっちり決まっているわけではなく、レストランなどで催すことが多く、おおよそ何時から始まるというだけである。一晩中生バンドが入って演奏をするなか、ダンスに、飲み食いに、不特定多数の人間が入り出すとい

うようなパーティーであるから多少人数が増えてもいい、と考えられているようである。(少ないよりは多い方が、とでもいうのか、それともたまたま私の質問に答えてくれたドイツ人の考えか?)

「結婚式「後」ではなく「前夜」に、この一晩中のパーティーをやるのは当人たちはいかにも大変だなあと想像させられるのだが、大変なのは実はこれからである。「騒々しい夜」と命名されているだけあつて、この夜はものすごい音。なんと、招待された客たちは、皆、思いっきり皿を建物の前の地面にぶちつけて割るのである。」

いや、もちろん料理が載っている皿ではない。いちおう割るための安く仕入れた傷物の皿などが準備されて山積みになっているのだ。しかしそれは、結構な一山である。おいおい、これを割るのかい、と思つているとほんとに客たちはそれを思いっきり割るのである。かけらが多いいい、音が大きいほど、魔を払うという。それで、客たちは思いっきり祝福を込めて皿を粉々に割るのである。その、粉々に割ってくれた皿のかけらを、せっせと片づけるのは結婚式を挙げる夫婦当人たちである。手

押しの一輪車をせっせと操って、ほうきで集めたかけらを所定の処分場所まで運ぶ。なんとまあ、これが客の出入りする一晩続くのだからたまらない。明日の結婚式には当人たちはもうふらふらだろう。しかし、ここでの働きぶりを見て、新婦は新郎が働き者かどうかを見極める、というから大切だ。がんばってもらおう。こうして新郎新婦は、お客の皆様が建物の中でダンスにごちそうに酒に楽しい時間を過ごしている間、ほと



こうして一晩中掃除が続く...

んどゆっくりもできず建物の前で掃除をしているのだ。

この楽しい(?)しきたりの他にも、ドイツ人の結婚前のしきたりには古い風習の名残が感じられるものがある。

かつて結婚したい男女は、結婚が決まると一定期間その旨を書いたものを市役所や教会の掲示板に掲げた。もしその結婚に異議のあるものは申し立ててよいのだ。そんなことする人はいたのだろうか。まあ結婚に関しては昔の人もいろいろあつたかもしれない。共同体の賛同を得ることが大切だという考え方は、個人と社

では戸籍役場での式がとて重要である。少しだけ花やリボンで飾り付けられた役場の、小さな証人台の前で、こぎれいなワンピースと背広の新郎新婦が二人の婚姻証人とともに結婚の証書にサインをし、これで二人は法的に夫婦である。

この日の夜ポルターアーベントとなり、次の日に教会での式、そのまま教会の前から車で走り出てハネムーン、というのが段取りとして多いようだが、もちろんそれは当人たち



の考え方による。

ただし、絶対に変えられない順番がある。それは、戸籍上きちんと結婚して、その証明書を携えてでないと教会での式は挙げさせてもらえないということである。日本人は逆に考えがちだが、法的にまだ夫婦でないものは、教会の祭壇の前で夫婦の誓いをさせてもらえないのだ。

そして結婚の時、意外に神経を使うのが、宗教・宗派の問題である。普段友人として、近所として、おつきあひするぶんには相手は何教であろうが、理解していればそれでよい。実際、外国人が多く住むドイツでは、ユダヤ教、イスラム教の人々もそれぞれの教会やモスクをもっている。しかし、宗教の違いを乗り越え

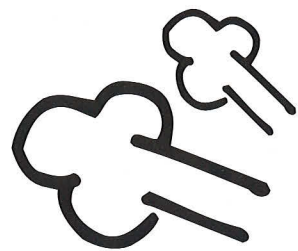
ところ、結婚式とは? 教会でドレスを着て祭壇の前に立つ式を思い浮かべる人が多いだろうが、あちら

て結婚するとなると、これは親族を含め、たいそう神経を使い、しっかりと話し合つて、どちらの宗教で、どこで式を挙げるか、合意する必要がある。カソリックとプロテスタントの二人が式を挙げる場合でもすでにそうなのだから。

「ステンドグラスのチャペルで式を挙げるのが夢なの」というぐらいにしか考えられなかったりする日本人には、彼らにとつて宗教がどれだけ神聖なものであるか、どうぞわかつていただきたい。

(しおみゆり/高知高専・高知大)
(学・高知女子大学非常勤講師)

挑戦 転記 運奮闘記



田代夕子

「好きこそものの上手なれ」とは、本当にそのとおりだと思った。十代の学生や二十代の人は、毎回、確実に教習項目が進み、あつという間に仮免をとった。

自動車学校の技能教習のことである。

片や、私はといえば、初めて車のハンドルなるものをにぎり、それアクセルだ、ブレーキだ、今度はルーミミラーで後続車を見てだのと、横に座った教官に次々と言われても、耳に入ったものではない。前の晩、運転教本を暗記するほど読んできて、何の役にもたたない。

なに、年をとっても（五十六歳）、この身体！ だてに日舞をやっているわけではない。身体のしなやかさと感性に

自然の姿、時間の流れ、人間というものの、生命というものの、生きていくということ……。何もかもが大切に思えてきた。

私は、来る日も来る日も、庭の植物や土をいじったり、雲の流れや降る雨を見つめて過ごした。静かな時の流れの中で、私は自分の心身がいやされていくのがわかった。

しばらくすると、私は、何かできるときのような、生きていくという感じのする思いをしてみたいと思うようになった。

あれは、私が小学生の頃。見とおしの悪い、直角に近い狭いカーブの道だった。自転車に乗った私がゆっくりカーブを曲がろうとした時、いきなり目の前に軽トラックが突っ込んできた。私はとっさに道路に沿った五十センチくらいの溝に、ちょうど自転車に乗ったままのまっすぐで、ことんと落ち込んだ。左側のコンクリートの塀に寄りかかるようになって。軽トラックは、私の身体を間髪すり抜けて、塀に当たって止まった。あわてて車から降りてきたのは、エプロン姿でもんぺをはいた農家のおばさんだった。

あの時の、車がかぶさってくるような恐ろしさならなかった。あの

かけては負けてはいない、と自負していた。げんに、学科テストは、若い人を尻目に一発合格！ 記憶力ではひげをとらないと、内心、にたりとしたのもつかの間。

身体がついてこないというのは、このことだった。毎回、復習項目ばかり、先へ進む気配がない。それも

そのはず、車がまっすぐに進まない。カーブでハンドルを早く切りすぎで、あとが……おっと、フェンスにぶつかると。あつ、今度は隣の車線に飛び込んだ。ブレーキを踏みすぎて、車が止まってしまった。……などなどの連続。これでは私が教官だとしても、また復習させるだろう。

一日一回、五十分間、教習所の中のコースでこれをやると、精も根も

ショックは、今も続いている。そして、その時以来、車には縁のない人生だった……。

……が、これに挑戦してみようと思った。

私にとつて、これ以上むづかしいことはないように思えた。

そして、自動車学校へ入校。が、いざスタートはしたものの、車が怖いという感じは、やはりなかなか拭いきれない。将来運転できるようになった時のことを思い浮かべ、車を好きになろうと考えた。運転する楽しみというものを知りたいとも思っている。

けれども、何よりのよろこびは、きのうよりは今日、今日よりは明日と、できることが少しずつ増えていくこと。たとえ、それが小さな事でも、その達成感を味わった瞬間は、まさに、生きていく実感そのものである。

「できた！」とよろこぶ瞬間も、「また、失敗」と落胆する瞬間も、生きていけばこそそのことである。免許証というゴールよりも、それまでの過程を大切にしたい。人生は、プロセスだと思おうから。さあ、明日も挑戦だ。

(たしろゆうこ)

尽き果てるほどに疲れる。家に帰っても、しばらくぼーっとして、座りこむ。夜、床に就いて目をつむっても、教官の言葉や、今日の走行状態などに思いをめぐらせ、なかなか寝つかれない。

ああ、また、明日もこれか、と。

ところが、十回目ぐらいになると、気持ちに少し余裕ができたのか、車に慣れてきたのか、かなり、まっすぐに走れ、カーブもうまく曲がれるようになった。うれしかった。胸の中がぽつと温かくなり、不思議なことに、緊張していた全身の力が抜けて、自然な構えになったような気がした。すると、指示を出す教官の言葉をしっかりと聞きながらハンドルをまわし、アクセルを踏むこともできるようになった。

「習うより慣れろ」、だろうか。

自分が車の運転をする、などということは、夢にも思ったことはなかった。運転できれば便利とは思っていても、車が好き、とは言いがたい。むしろ、車は怖いという感が強かった。自分が運転するのはいやだと、ずっと思っていた。

命びろいをしたから、自分にとつて、最も無理かもしれないようなこ

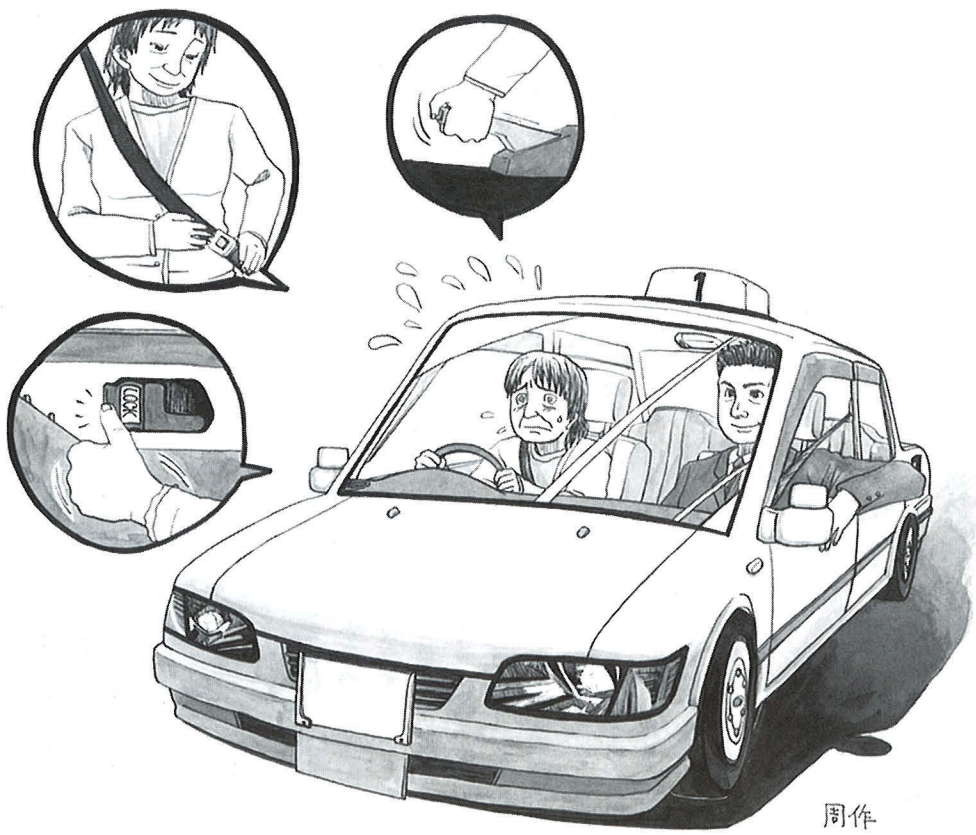
とをしてみようと思った。

昨秋、思いきって私は心臓手術を受けた。仕事を退職することから始めて、二か月ほどかけて、自分の身辺整理をした。人には見せなかったが、覚悟をきめて、手術にのぞんだ。まる二日後、麻酔からさめかけて、医師の言葉を理解することができた時、私は、「しめた！ 生きていくぞ！」と思った。さいわい経過も順調で、無事退院した。

実は、手術前から漠然と考えてはいた。もしもこの大手術から無事生還したら、それまでとは別の生き方をしてみよう。

今までは、ただ、ただ、日々の生活のためにと、考えてみると、「過労」(ストレス)「睡眠不足」と、心臓病になるための暮らしぶりだった。でもこれからは、自分のために生きたい。残りの人生、少しは自分のためにも生きようと思った。

退院後、以前から続けていた日舞のけいこの日が、いっそう待ちどおしくなった。ふと見ると、庭の花海棠が満開だった。この家に長く住みながら、退院後、初めて気づいたような気がした。家の前にある山の緑や、小鳥の鳴き声、空の青さ、春風のやわらかさまで、なんと、初めて気づいたのだ。



周作

自分が好きだったロックバンドのコンサートに、機材搬入や舞台設営のアルバイトに誘われたのは十五歳の時だった。

はじめてのコンサートのアルバイト。その当時やっていた他の種類のアルバイトと違って、何をしたらいいのか見当もつかない。当日の朝は緊張感いっぱい、いつもは正面の客席入り口からしか入ったことのない、ホールの裏口に集まった。

搬入口には十一トントラックの機材車が何台も並び、ホールが開く十分ほど前には、ツアースタッフの、いかにも「ロック」な風貌のお兄ちゃん達がタクシーに乗ってやってきた。朝九時に搬入口の大きな扉が開き、アルバイトは全員、気合いを入

んで、口が裂けても言えないような雰囲気の中、フラフラしながら必死に舞台まで機材を運んでいく。なんとか機材を舞台まで運び、正面を向くと、目の前にホールの客席



舞台のお仕事

青木達之

れるため(?)の大きな声で「よろしくお願ひします!!」とスタッフに挨拶をし、搬入が始まった。トラックにはわずかな隙間も見えないほど機材がぎっしりと積まれており、それを手際よく降ろすスタッフのお兄ちゃん。「ケガをするから受け取ったら声を出して!」と、どう見ても一人では持てそうにない機材を渡されながら、こっちは必死で「ハイッ!」と受け取るものの、やはり予想通り、いやそれ以上の重さで、しかしそれを「持てません」な

が広がった。ステージから見る客席はこんなのかあと、ぼーっと客席を見ていると、「荷物を置いたら走って戻ってこい!」とスタッフの怒鳴り声。九時の搬入開始からりハ

サルが始まるまでのわずか六時間ほどの間に、なんとでも舞台を作り上げるのが彼らの仕事であり、それまでは一時でも気を緩められない。そんな空気はアルバイトにも十二分に伝わり、自分も我を忘れて走り回った。

搬入が終わると、舞台、照明、音響、楽器とおおまかに分けて四つのパートの仕込みを始める。自分が呼ばれた場所では、四人がかりでなんとか持てるようなスピーカーを十二個、三段に組み上げるといふ作業を行い、その後音響担当のラモーンズのTシャツを着た金髪のお兄ちゃんにくつついて、スピーカーのスタッキング、モニタースピーカーの設置、ミキサの設置などの手伝いをした。見たこともない複雑な機材を慣れた手つきでセットしていく金髪のお兄ちゃんはとても格好よく、お兄ちゃんの方でも自分を気に入ってくれたようで、作業の説明をしながら好きな音楽の話や、バンドと一緒に日本を回る仕事の楽しさやしんどさなどを話してくれた。

昼過ぎに大体のセットが終わると、アルバイトはいったんお役ご免となり、その後本番中の客席警備を挟んで、公演終了後の搬出を行う。ついさっきまであこがれのバンドが演奏

していたこのステージを、バンドが去った数分後には取り壊す作業。しかもホールは二十二時までに退出しなければいけない。本番が終わって一息を入れる余裕もなく、朝以上に気合いを入れての作業だ。自分は設営の時に付いた金髪のお兄ちゃんの指示に従って、必死になって機材を運ぶ。体力の無さか、途中あまりの暑さと喉の渇きで倒れそうになったものの、なんとか最後まで手伝いをした。

二十二時過ぎ、最後の機材を積み込み、アルバイト全員でスタッフに向かって「お疲れさまでした!!」と挨拶。仕事を教えてくれた金髪のお兄ちゃんに「来年のツアーにもアルバイトにこいよ」と声をかけてもらった。

このお兄ちゃん達は今晚バスで移動して、明日は隣の会場で今日と同じ仕事を繰り返すそうだ。毎日この緊張と、終わった後の達成感を味わいながら日本中何十か所と回っていく仕事。

漠然と旅をする仕事をしてみたいと思っていた自分が、確信を持って「舞台の仕事に就きたい」と思ったこの日のことは、今でも心に残っている。

(あおきたつゆき)

高知市文化プラザ かるぽーと 春の自主事業のご報告

◆至福のひととき―岡本知高 ソプラニスタ・リサイタル―

かるぽーと二年目の自主事業は、岡本知高さんの演奏会で始まりました。岡本さんは宿毛市出身の音楽家で、男性ながら女性ソプラノの声域を持つ世界的にも珍しい歌手として活躍されています。

四月十七日の公演は、発売から一週間でチケットが完売し、急遽一週間後の追加公演を決定しました。追加公演も完売で、岡本さんは高知の皆さんに熱烈に迎えられたといえます。「県都・高知市での演奏会はやはり緊張します」と言いながらも、岡本さんは観客の熱気に応えるように精一杯務めてくださいました。

大澤宣晃さんの息の合ったピアノ伴奏と、岡本さんの才能を見抜いた恩師・神崎克彦さんの司会により、温かくくつろいだ雰囲気で行われた演奏会。曲目は有名なオペラの歌曲ばかりでなく、「翼をください」や

「川の流れるように」など幅広いジャンルの曲が演奏されました。岡本さんの、歌が好きでたまらないという気持ちや歌で何かを伝えたいという思いがストレートに伝わってきて、観客にとっても、まれに見る至福のひとときといえる演奏会となりました。

◆新チャンピオン誕生―「第二回詩のボクシング高知大会」

昨年に引き続き「詩のボクシング高知大会」が四月二十六日、小ホールで開催されました。二人の対戦者がリングの上でオリジナルの詩を朗読し合い、いかに観客を惹きつけたかを競う「言葉の格闘技」です。

四月十三日に行われた予選会には、県下四市五町一村から三十人の参加者があり、年齢も十六歳から六十代までと幅広く、関心の高さがうかがえました。この中から本選出場者十六人が選ばれました。

自分の内面をさらけ出す人、社会や世界のありさまを語る人、架空の物語を紡ぐ人―朗読ボクサーは互いの詩をぶつけ合いながら、自らの言葉で観客とコミュニケーションしようとする。昨年十五歳でチャンピオンになった「Mr.Michio」選手を二回戦で破った「モアイ拓三」選手が、やはり昨年の準優勝者「高瀬草ノ介」選手を撃破して、新チャンピオンとなりました。モアイ拓三選手は七月に東京で行われる第三回全国大会に高知代表として参加します。

◆徹底的にエンターテインメント―「スーパーダンスバトル2003」

五月八日、大ホールで行われたダンスショーは、いかに観客を楽しませるかを徹底的に考えた舞台でした。パイパイ鈴木と西島千博、この二人の対照の妙にバグズ・アンダーグレイヴの八人のダンサーが絡み、休憩を除く二時間十五分、まさにノンストップ・ダンスング。

観客を舞台上げたり、客席で踊らせたり、これほど形だけでなく観客の気持ちも舞台と一体となった公演はめったにないと思われれます。アンケートでも、「初めてのダンス公

演がこんなに楽しいものとは……」など、観客開拓につながるものがありました。

◆現代美術に三千人―「OVER DRIVE EXHIBITION」

「新しい世代による造形表現」

四月二十九日～五月十一日、県内若手作家十七人が市民ギャラリーの第一・二展示室の大空間(天井高六尺、約千平方尺)を使い、ジャンルを超えた精力的な造形表現を行いました。

終わってみると約三千人の入場者があり、特に若い人たちが長い時間をかけて鑑賞していったようです。作品の配置も一つの表現として「開かれたアート」の可能性を追求しようとした実行委員会メンバーの狙いは成功したと思われれます。



▶岡本知高さんのリサイタルから



散歩の途中で

昭和小学校の校庭。バラに囲まれて小さな看板が立っていた。そこに記された、台風10号による高潮の最高潮位（海拔3メートル）は、前の歩道に立った大人の目の高さくらい。このとき、下知地区では3000世帯以上が被害を受けたという。同地区は5年前の集中豪雨でも浸水被害を受けた。雨の季節を前に、水害の恐ろしさを思い出した。（ところで、知と地が入れ替わってますが…）

風俗

「男らしく」ありたい

男は「男らしく」女は「女らしく」と子どもに教えるのはいけないと耳にしているし、口にするのも憚られる。いつごろからかは覚えていないが、男が「男らしく」、女が「女らしく」てはいけなくなってきた。「らしく」と他人に論じられることで、「男らしく」女は「女らしく」と規定されることに対する反発があるのだろう。逆に「自分らしく」といって、「自分は自分らしくありたい」と自らを規定するぶんには抵抗はない。なぜなら「自分らしく」はすなわち、他人とは違う価値を自らに見出すことができる「個性」に繋が

るからだろう。ところが「自分らしく」を認めることはそれほど簡単ではない。私は「自分らしく」と思った記憶がない。どちらかといえば「女々しい」（お叱りを受けそうだが）私としては、優柔不断のいまのまま、「男らしく」ありたいと思うことはほぼである。もちろん自分の連れ合いにも「女らしく」を心のなかでは求めている。確かに、「男らしく」の発言は誤解を生みかねない。なぜなら、私の「男」と「女」の概念を理解した上で「男らしく」を理解してもらって、なご無理な話なのだから。それでも誤解を恐れず言えば、やはり私は「男らしく」ありたいし、少なくとも連れ合いには「女らしく」あってほしいと思うのであるが……。ごめんなさい。

（男郎花改め五月間）



Original goods Artist goods Ticket

かるぼーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動が続いている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田2-1
高知市文化プラザかるぼーと3階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝日の場合は営業）

今号の表紙

「蛙と老婆」 ツシマユキコ

親友が大の蛙嫌いなのをきっかけに、彼女を思い出しながら描いたものです。今までと違う空間に飛び込み、計らずも孤立してしまった時代に、親友の存在はいつも私を支えてくれました。そんな掛け替えのない出逢いを与えてくれた高知と、親友のかっちゃん。そして素晴らしい仲間たちへ…心から、感謝！

（つしまゆきこ・岡山在住）

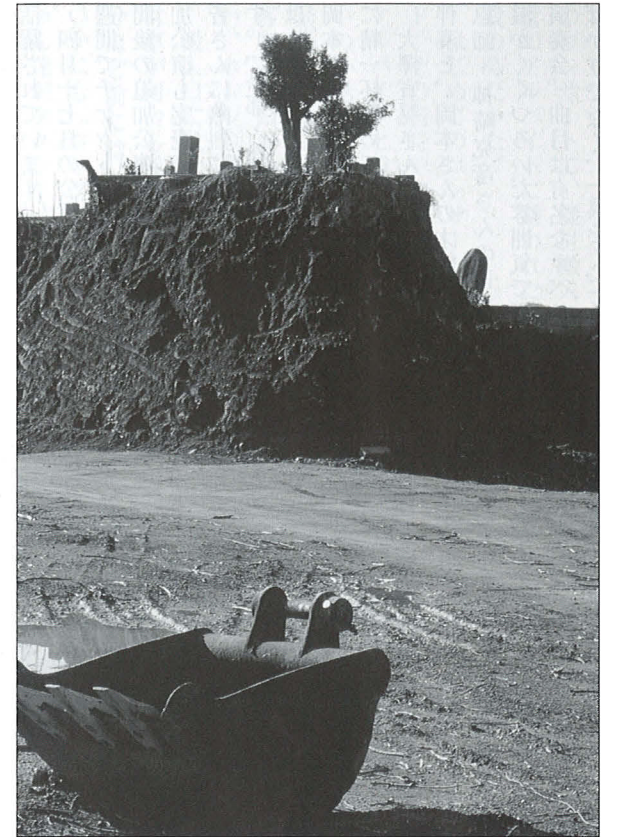
高知を撮る

第19回写真コンテスト入賞作品

或る風景

（平成14年 高知市）

山岡勇蔵



墓参りの時丹中山にて目にした光景でした。工事中のようでしたが、天空の曇りがかな？

北イタリア出身の著者は、一九八九年に、ハスローフード協会Vを立ち上げて、会長に就任した人物である。

スローフード

風俗歳時記



日本では、「ニッポン東京スローフード宣言」を刊行して、首都圏の安全・美味な食材を豊富なカラー写真で紹介しているグループをはじめ、いくつかの県にスローフードの会が誕生していて、会員は約三千人と聞く。

本県においても、△工口農家Vの有資格者による栽培面積が増加中であり、米糞士として初めて南国市大篠小学校の教頭に就任して、食育に励んでいる、甲藤温子さんのような大ベテランもいる。

（朴）

「食事べらゆくりとろろ」という、多忙な現代人の食生活を見直す運動。その対極にあるのが、ファストフード。と言って、食事の遅速の問題ではなくて、大切なのは、その根底にあるハスローフード哲学Vである。

ちなみに、同協会のシンボルマークは、ゆっくり歩くハカたつむりV。モットーは、①希少・良質な食材生産者の支援、②伝統的食品の保護、③子供を含め、消費者に対する味の教育。二〇〇二年現在、会員はイタリアで三万人、全世界で七万人を数え、なおも増え続けているという。

助成：財団法人地域創造

♪音楽のある街が
吹奏楽

【全日本吹奏楽コンクール5年連続金賞受賞団体】

土気シビック ウインドオーケストラ

Toke Civic Wind Orchestra

高知公演

2003年

6/21 高知市文化プラザ大ホール
[土] 開場17:45 開演18:30

Program

演奏：土気シビックウインドオーケストラ

Once More Unto the Breach ……S・メリロ

シンフォニア・フェスティヴァ ……A・ランニング

2003年度全日本吹奏楽コンクール 課題曲よりⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

スクリーン・ミュージック・メドレー (ET, バックドラフト他)

……他

*演奏曲は都合により変更になる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

全日本吹奏楽連盟



感動を呼ぶ
迫力のサウンド!
市民吹奏楽団の最高峰。

Kayo Hiroyuki

指揮 加養浩幸



主催：(財)高知市文化振興事業団・「音楽のある街」実行委員会

後援：高知県吹奏楽連盟・高知市民バンド連合会・高知県合唱連盟
高知新聞社・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・NHK高知放送局
KSSさんさんテレビ・KCB高知ケーブルテレビ・エフエム高知

一般¥3,000(¥2,100) 高校生以下¥2,300(¥1,600) 全席自由

※()内の料金は身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名の料金です。
※未就学児童のご入場はご遠慮ください。

【前売り券販売所】

高知市文化プラザミュージアムショップ:088-883-5052
高新プレイガイド:088-825-4335
高知大丸プレイガイド:088-825-2191
高知県民文化ホール:088-824-5321
高知県立美術館ミュージアムショップ:088-866-8118

【通信販売】

直接購入が出来ない方は通信販売をご利用下さい。必ずお電話(088-883-5073)にてご予約の後、郵便振替口座【加入者名：(財)高知市文化振興事業団 口座番号：01680-5-14869】に公演名・券種を明記の上、チケットの合計金額と送料430円を合計した金額をご入金下さい。入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

【公演に対するお問い合わせ】

(財)高知市文化振興事業団企画事業課 TEL.088-883-5071
http://www.bunkaplaza.or.jp



宝くじは
豊かさ築く
チカラ持ち。

宝くじは、広く社会に
役立てられています。